

福江のお祭り

福江とその周辺の島々の村々は、長い間、海と険しい地形によって互いに隔てられていた。その結果、民俗伝承の豊富なバリエーションが長年にわたって発展してきた。村々は、それぞれの環境や生活様式と結びついた独自の風習を作り上げてきた。たとえば漁村では、伝統的な神楽の舞にイルカなどの海の生き物が登場する。また、海岸近くの汽水域にしか生育しないイグサに似た植物で祭りの衣装を織る集落もある。

島々の多様な宗教構成もまた、豊かな文化遺産に貢献している： 神道や仏教のお祭りが、クリスマスのイルミネーションや聖人の祝日といったカトリックのお祝いと並んで行われている。

念仏踊り

日本各地の夏祭りでは、念仏踊りが行われる。念仏踊りは、踊り、音楽、阿弥陀仏の呼び名を組み合わせた仏教の修行法である。その起源は定かではないが、10 世紀の遊行僧空也（903～972 年）に始まり、後に一遍（1234～1289 年）という説教師によって、浄土教を大衆に広める方法として提唱された。何世紀にもわたり、各地で独自の進化を遂げた念仏踊りは、ユネスコの無形文化遺産に登録されているものもある。

福江では、これらの踊りは夏のお盆に行われ、家族が亡くなった先祖を供養する。福江島は比較的小さな島であるにもかかわらず、念仏踊りのバリエーションが豊富で、町ごとに衣装、歌い方、動き、名前までが異なる。福江の方言では、踊りは大まかに「ちゃんここ」（踊り手の鉦や太鼓の音を擬音

で表したもの）と呼ばれるが、玉之浦では「かけ」、富江では「オネオンデ」と呼ばれる。どの呼び名であれ、高い笠をかぶった踊り手が、首から下げた太鼓を打ち鳴らしながらリズムカルに謡い、連動して動く姿を見ることができる。

ハトマト祭り

ハトマトは、1 月の第 3 日曜日に下崎山で行われる神道の祭りである。この祭りの具体的な起源や意味は時代とともに失われてしまったが、何世紀にもわたって毎年祝われてきた。

その日は、白浜神社で行われるアマチュア相撲から始まる。次に一連のゲームが始まる。前年に結婚した女性たちは華やかな着物を着て、酒樽の上で不安定なバランスをとりながら、花月と呼ばれるバドミントンのようなゲームをする。次に、白いふんどし姿に鉢巻きをした男たちが、体や顔にすずを塗り、縄で作った重い玉を相手の陣地に入れる「玉せせり」という荒々しい競技に備える。この競技の間、選手だけでなく観客も黒い煤にまみれてしまう。最後に、青年会と消防団が綱引きで対決する。

祭りのメインイベントは「大草履（巨大なサンダル）」と呼ばれるもので、稲わらで編んだ長さ 3 メートル、重さ 250 キロの草履を地元の男たちが担いで通りを練り歩く。その途中で、男たちは群衆から女性をさらい、サンダルの上に放り投げて何度も空中に弾き飛ばす。おそらく、サンダルの上に投げられた未婚の女性は、その年に幸運が訪れると言われている。行列はやがて神社に戻り、そこに祀られている神にサンダルを捧げ、祭りは終わる。